



エネルギー・触媒領域における HORIBA の取り組み

HORIBAはカーボンニュートラル実現に向けて、エネルギー・触媒領域における分析・計測装置の開発・生産力・サービスの強化、各国の政府系機関やアカデミア・有力企業との強固なパートナーシップ構築を進めています。

また本領域におけるHORIBAの歴史は、弊社創業者 堀場雅夫の父、堀場 信吉まで遡ります。堀場信吉は京都帝国大学において触媒化学研究に取り組み、その技術は現在の HORIBA にも受け継がれています。

水素・新エネルギービジネスの新施設 「HORIBA eHUB」 オープニングセレモニーを開催



2022年9月12日に水素・新エネルギービジネスの新施設HORIBA eHUB（ハルレーン、ドイツ）においてオープニングセレモニーを開催しました。本施設は燃料電池やバッテリー、水の電気分解により、水素ガスを製造するエレクトロライザー（水電解装置）などの評価装置を開発・製造・販売するホリバ・フェューエルコン社の生産力増強を目的に建設し、今年度より稼働しています。



外観写真



施設内部写真



施設内部写真



セレモニーの様子

HORIBAモビリティ・コネクティビティ研究所 (HORIBA Institute for Mobility and Connectivity2:以下、HiMaC2) オープニングセレモニーを開催



2022年10月11日に、エネルギーとモビリティの融合に伴う新たな課題に取り組む、HORIBAモビリティ・コネクティビティ研究所(HiMaC2)のオープニングセレモニーを開催しました。本研究所では、車両システムからグリッドあるいは交通システムまでの広範囲の課題で次世代の課題を先取りした研究に加え、電池や燃料電池の基礎となる電気化学やそれらの素材研究まで、多岐に渡る研究が立ち上がっています。



建体外観



施設内部写真



施設内部写真



セレモニーの様子



堀場 信吉 (ほりば しんきち)

1886年11月29日～1968年2月16日

物理化学者・理学博士

触媒関係著書：

『触媒の理の理論』化学講演集 京大化学研究所 1931

『触媒作用の理論』触媒化学講座1巻 堀場信吉 1938

『我が国に於ける触媒の研究 - 第一編』

日本学術振興会学術院第13小委員会編纂 岩波書店 1936

堀場信吉は1900年代初頭にドイツで発明されたハーバー・ボッシュ法と呼ばれるアンモニア合成技術を用いて、アンモニアを原料とする窒素化合物を使った化学肥料(硫酸)の製造を提言していました。硫酸の需要は第二次世界大戦後の食糧難の時代に増大し、硫酸の製造を支える分析機器として、堀場雅夫が開発した堀場製作所の創製製品であるpHメーターが用いられました。硫酸の需要拡大は、創製製品のpHメーターが広く普及するきっかけとなり、堀場信吉の提言がHORIBAの事業拡大の礎になったとも言えます。また、堀場信吉が欧州から学び日本に導入した触媒化学は、カーボンニュートラル達成の重要な要素であり、これらがHORIBAをめざす事業展開にも繋がっています。

堀場信吉経歴

1918年 欧州へ留学、オランダ・Amsterdam大学、イギリス・Liverpool大学、ドイツ・Leipzig大学などで、世界で唯一の物理化学を学んだ。堀場信吉の学問体系の四つの柱といわれる高圧化学、触媒化学、光化学、コロイドの基礎はこの時期に固まったとされる。1924年 助教授を経て京都帝国大学教授となり、その後、分析化学講座を担当し理学博士の学位を受けた。1942年 化学研究所(現・京都大学化学研究所)第3代所長に就任。3年間所長を務めた。第二次世界大戦後は「化学でもって国に頼らん」とし触媒反応や爆発反応の業績を元にした航空機燃料に関する基礎研究を行った。また、大阪府立浪速大学第二代学長に就任(在任中に大阪府立大学に改称。令和4年度より大阪公立大学として改称)。さらに南立音楽短期大学(現・京都府立芸術大学音楽学部)初代学長に就任し文化活動にも力を入れた。1966年文化功労者として表彰された。